

みやぎの多文化な人 宮城県内で活躍している海外出身者をご紹介します。

あの日から10年 東日本大震災から間もなく10年になります。被災された外国人の方々に、当時の様子やその後の歩みについて語っていただきました。



リチャード ハルバーシュタットさん



太田順子さん



杉山美恵さん



佐々木アメリアさん

リチャード ハルバーシュタット さん

イギリス出身 石巻市在住

石巻市復興まちづくり情報交流館 中央館 館長

1993年から石巻市で暮らしています。「あの日」は忘れたくても忘れられません。でも、その後の日常の記憶は薄れつつあります。震災からしばらくは石巻に来るだけで津波の爪あとを目にすることができましたが、今は復興事業が進み、ほとんどわからなくなりました。それに震災を知らない子どもも増えました。だからこそ、この石巻市復興まちづくり情報交流館(以下「情報交流館」)のような施設を維持して、震災について伝えていくことは重要です。でも、楽しい話題ではありませんし、伝え方が重要だと思っています。外国人の私が話をすると、より関心を示してもらえるので、聞き手の心に残るよう頑張っています。

この10年の心理的变化として思うことは、住民の精神的格差です。震災直後は、誰もがトラウマを抱え同じ立場でした。今は前に進んだ人がいる一方で、立ち直れていない人もいます。情報交流館では、震災被害の写真を入口から奥まった場所に掲示していますが、今もそこに足を踏み入れられない方や、被災前と復興計画の2つのジオラマ展示を見て涙ぐむ方もいらっしゃいます。私も以前は、被災体験を訪問者の方々に語るのが辛く、涙してしまうこともありましたが、今は落ち着いてお伝えできるようになりました。辛い想いを抱えている方々には「あなたのそばにいますよ」と心を寄せていることが伝わればと、さりげなく接するようにしています。

震災後、私自身は帰国を直前で止め、石巻に戻ってきたことで新たな人生が始まりました。それまで石巻専修大学で英語教育に携わっていましたが、その職を辞してこの情報交流館の館長になった

のは、震災で人生観が大きく変わったことが大きいです。ここで国内外の多様な人たちに接し、刺激を受け、価値観も広がりました。新型コロナウイルス感染症流行前に来港した大型客船の乗客を市内各所に案内したときのことは強く印象に残っています。私の体験を交え、私の母語でお伝えしたのですが、どの方も熱心に耳を傾けてくれ、津波による被害、住民の様子や仮設住宅での生活などを気遣いつつ、たくさんの質問をしてくれました。

あなたが現在いる場所に、津波は来ないかもしれませんが、もしあなたが学生で進学したら、そこは海の近くになるかもしれません。就職先、転職先はどうでしょう？あるいはたまたま日帰りで海へ遊びに行ったときだったら？決して恐れながら生活して欲しいわけではありません。ですが、「ここで災害が起きたらどうする？」と考える気持ちを常に頭の片隅に持っていてもらいたいと思います。

太田順子 さん

中国出身 名取市在住

1999年来日してからずっと名取市に住んでいます。7年前にMIAからの紹介で、外国籍の子どものサポートを始めました。現在は、名取市と亘理町の小学校で平日5日間、中国出身の子どもたちの母語支援や学習のサポートをしています。わずか1年余りで日本語の作文が書けるようになった子どもの成長ぶりを見て喜ぶ反面、先生方や自分のサポートが子どもに上手く伝わらず、もどかしさを感じるときもあります。

震災後、混乱の日々が続く中、津波で行方不明になった夫の従弟を探して、私たち夫婦もいくつもの遺体安置所を訪ね歩きました。言葉にはできない想いが今もあります。自宅の屋根瓦はすべて落ちて雪や雨が家の中まで染み込み、1台のストーブに家族5人が身を寄せて寒さをしのぎました。ブルーシートに覆われた我が家は風が吹くとピタピタと音がし、眠れない日々が続きました。当時同居していた姑は、震災によるストレスからなのか認知症状が現れ、食事に対する執着が強くなりました。姑と幼稚園児と小学生の子どもたちのために、ご飯を用意してあげなければ！との使命感から頭も身体も徐々に動きはじめ、呆然としていた日々から抜け出して前向きになりました。あのときご近所の方々や友人・知人から助けてもらったこと、かけてもらったひとこと、それに配達されたおにぎり、あのありがたさは忘れられません。生かされた命で家族が安全、健康、そして笑顔で暮らせることに感謝しています。

19歳と16歳になった子どもたちが自立するまであと少し。近くの日帰り温泉へ行き親子でホッとできる時間を楽しんでいます。2人には、困難に立ち向かえる強さ、生き抜く力を持つ人になってもらいたいと願っています。

10年目の追悼は、新型コロナの影響や仕事の都合で、例年のように市民の追悼の場へ行くことはできないかもしれません。でも、どこにいても午後2時46分になったら海に向かって必ず黙とうします。

杉山美恵さん

台湾出身 東松島市在住

台湾に仕事でやってきた夫と知り合い、雄勝町(現石巻市雄勝)に嫁いで37年ほど経ちました。最初のころ、台湾出身のわたしは寒さが苦手な日本の冬の時期は毎年のように里帰りしました。でも、夫はいちども早く帰って来いと催促せず、待っていてくれました。第二の故郷という言い方がありますが、わたしにとって雄勝は日本で苦勞してようやく手に入れた居場所であり、これだけ長く暮らし、近所のみなさんにもほんとうによくしていただいてきましたので、雄勝こそが第二ではなく、第一の故郷だと思っていました。しかし、震災で自宅も夫婦ふたりでやってきたホタテ養殖もすべて流されてしまいました。

当時、高校入学が決まった長男と小学校3年生の次男の二人を抱えて、3か月間避難所暮らしをしました。次男は津波のショックで体調を崩しがちでしたし、その後学校のプールに入ることができなくなってしまいました。夫は地区の役員をしていた関係で雄勝に残り、わたしは息子たちの医療ケアができる河北総合センター(ビッグバン)で避難生活を送りました。6月になって知人の紹介で東松島の一軒家を借りることができました。次男を転校させてさらにストレスをかけることも忍びなく、その年は石巻市内の小学校にわたしが車で毎日1時間ぐらい送迎しながら通わせていました。

震災の翌年から石巻地域に暮らす外国出身のお母さんたちが集まって語らう「ハッピーママの会」というグループ活動をしばらく続けました。そこは日本語の勉強ということではなく、日々の生活で感じている疑問、日本の生活で知らず知らずたまっていくストレスを母語で共有し、発散する場です。毎回20～30人が集まりました。ストレスをため込み過ぎると取り返しがつかないトラブルになることもありますので、震災後は特にこういう吐き出す場は重要だったと思います。

震災から10年。長いとか短いというのではなく、濃かったです。震災後の1、2年で一生分の経験をしたような気がします。夫は雄勝を離れ、別の街で生活することに躊躇はなかったようです。わたしは自分の居場所から離れることがいやでしたし、自分だけよい生活をするために雄勝の近所のみなさんを置き去りにしていくような罪悪感があって、なかなか踏ん切りがつかせませんでした。6年前に東松島に新居を購入し、こちらでも周囲の方々にとてもよくしていただいて「第二の故郷」となりつつあります。ですが、雄勝の元自宅があった土地は売却せず、いまも年越しには何もなくなった自宅跡に松飾りを飾りに行っています。

佐々木アメリアさん

フィリピン出身 南三陸町在住

日本に来て、もう40年以上です。ずっと南三陸町志津川に住んでいます。夫と小さなお店を開き、夏には海の家を経営したりしていましたが、自宅も店も全部流されました。その日から町内にある夫の実家で暮らしています。

震災後、同胞のネットワークによるささえあいが大切という機運が高まり、南三陸町やその周辺に住んでいるフィリピン人がフィリピンの国花の名を冠した「サンパギータ・ファイティング・レディーズ」というグループを立ち上げました。月に1回メンバーが集まって、カトリックのミサを行い、そのあと食事をしながらおしゃべりします。震災で辛い目に遭い、日々のストレスで気持ちが弱くなっていったこともあって、彼女らに寄り添い心を穏やかにする必要がありました。わたしは聞く側に回ってばかりで、あるときはそれがあまりに辛くなりいちどだけ教会の神父さんのところに駆けつけ、話を聞いていただいたことがありました。あのころは、同胞の間でもささいなことでも小競り合いになったり、変にハングリーになっていたのかもしれない。ここ数年、みなさんの生活も少し落ち着いてきましたので、名前を「サンパギータ・フレンドシップ・レディーズ」に変えました。もう戦わなくてもだいじょうぶ。

あるとき夫が自宅を新築しようかと聞いてきました。わたしは「自宅より店を再建しよう」と答えました。震災の2年後に仮設の店を再開してはありましたが、自宅より家族で働ける店を優先したかったのです。震災後に南三陸に戻ってきた娘と夫が新しい店を切り盛りしています。わたしは、平日は気仙沼の小中学校でフィリピン籍の児童生徒の学習サポートをしていますので、土曜日だけ店に出ています。

震災前、わたしは宝石、ブランドバッグといったぜいたくをあまりにも欲しがっていました。わたしがいま着ているこの服、実は支援物資です。いまはこの服にぬくもりを感じますし、これを着ていると自分はひとりじゃないと思えます。当時、たくさんのひとに支援をいただき、いまもそうした方々と交流があります。南三陸の海の幸をお送りしたりして、震災で新たに得た縁を温めています。

時の流れが速すぎて知らないうちに10年が過ぎてしまったかのようです。建物、道路はどんどん復旧復興していますが、ことばにならない辛さは残っており、心から笑える日はまだ来ていません。いまだに自宅の跡地には行かないようにしています。前に進めなくなるからです。いまはとにかくものを大切に、ひとの気持ちを大切に、1日1日を大切に生きていきたいと思っています。

ライブラリー

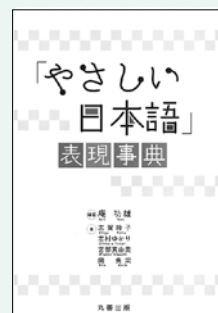
ライブラリーのコーナーで紹介されている図書は全て貸し出しまたは当協会図書資料室で閲覧可能です。

「やさしい日本語」表現事典 発行:丸善出版

編著:庵功雄 著:志賀玲子、志村ゆかり、宮部真由美、岡典栄

本書は、「やさしい日本語」を外国人とのコミュニケーションの手段として使うための実践例を紹介および解説しています。内容は3部からなり、I部は「やさしい日本語」の基礎、II部は、学校、PTA、保育園、行政、くらしなどの場面で具体的なやり取りの会話編と文章編。会話編の例には、学校の登録メールや町内会の集金についての説明、道に迷っている人への声かけなどの場面における通常の会話と「やさしい日本語」の両パターンがあり、言い換えのポイントが紹介されています。文章編では、会話編と同じ事例に加えて学校諸経費納入、給食でのアレルギー対応、集合住宅のエレベーター点検の案内文などもあり、明確にすべきポイントや、わかりづらい言葉や表現の解説と共に「やさしい日本語」の文例を載せています。III部では、文化の差異について、日本の慣習など外国人に説明する際の解説があります。

身近に外国人がいるけれど、困りごとについてどう声をかけたらよいか、説明したらよいかと考えている方は、ぜひ参考にしてください。



多文化なトピック

新型コロナウイルス感染症について多言語で相談できます

厚生労働省の電話相談窓口

電話番号 0120-565653

対応言語	受付時間(土日・祝日含む)
英語・中国語・韓国語 ポルトガル語・スペイン語	9:00 ~ 21:00
タイ語	9:00 ~ 18:00
ベトナム語	10:00 ~ 19:00

電話番号をよくお確かめのうえ、お間違えないようお願いいたします。

URL <https://www.covid19-info.jp/>宮城県・仙台市の新型コロナウイルス感染症
受診・相談センター

電話番号 022-211-2882 022-211-3883

対応言語	受付時間
英語・中国語・韓国語・スペイン語 ポルトガル語・日本語	毎日24時間
タイ語・ネパール語・ベトナム語 ロシア語・タガログ語 インドネシア語・ヒンディー語	月曜日～金曜日 8:30 ~ 18:00

3者通話で対応します。通訳につながるまで時間がかかる場合があります。

公益財団法人未来の東北博覧会記念国際交流基金助成金
助成事業募集のお知らせ

1987年7月から9月まで開催された「未来の東北博覧会」を記念して創設された公益財団法人未来の東北博覧会記念国際交流基金は、国際交流・協力事業や多文化共生推進事業を行う民間の国際交流団体等へ助成を行っており、現在、2021年度に助成する事業を募集しています。

助成金の対象となる事業、条件および手続きの流れについては、ホームページをご確認ください。

申請に関するご相談は、申請受付期間に限らずいつでも受け付けておりますので、まずはお電話ください。

助成対象事業の実施時期	受付期間
4月1日から 6月30日までの間に開始する事業	1月1日から 2月10日まで
7月1日から 9月30日までの間に開始する事業	4月1日から 5月10日まで
10月1日から12月31日までの間に開始する事業	7月1日から 8月10日まで
1月1日から 3月31日までの間に開始する事業	10月1日から11月10日まで

未来の東北博覧会記念国際交流基金

検索

問合せ先TEL : 022-275-3796 ((公財)宮城県国際化協会内)

多賀城市内で「多文化共生の輪」が広がっています!

MIAでは、今年度、県からの委託事業として、多賀城市内において「地域で広げる多文化共生の輪」という一連のプログラムを実施してきました。

多賀城市内にも外国人技能実習生が大勢暮らしていますが、職場以外での地域とつながりが希薄という、他の多くの地域と同様の課題を抱えています。

その課題の解決につなげようと、昨年度からいくつかの取り組みが行われていましたが、その時にできたネットワークを活かし、技能実習生を交えた多文化共生の地域づくりを進めようということで、共催団体として大代地区公民館、多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンターの皆さんに、そして



陶芸体験をしながら交流している様子

協力団体として多賀城市立図書館に関わっていただき、技能実習生が多く生活する市内大代地区において、複合的なプログラムを展開しました。

〈内容〉その1: 技能実習生と継続的に交流するサポーターの育成

その2: 技能実習生を交えての防災研修

その3: 技能実習生とサポーターなどが「陶芸」を通して交流

新型コロナウイルスの影響で、当初の予定からは変更点も多々ありましたが、共催団体の皆さんがこれまでに培ったネットワークのお陰で、町内会、防災対策協議会、高校生、市役所など、多様な団体・世代の方々にご参加いただいて、技能実習生と交流を深めることができました。参加したミャンマー人技能実習生からは、「日本人と直接話し合う機会があって嬉しかった」「地元の日本の方々と交流し、新しい経験や知識を得ることができた」といった感想の声が寄せられました。

今年度の事業で広がった「多文化共生の輪」を更に大きなもの、そして持続的なものにしたい、というのは関わった団体共通の思いですので、次年度もさらにこの取り組みを継続していくこととなっています。

コロナ禍で苦しむ外国人を支える支援の輪

昨年の12月、元宮城県海外移住家族会会長の吉田ふく子さんから「外国人の方々の支援に役立てていただきたい」と、個人で留学生等の支援にあたっていらっしゃるドバントゥアンさんへ、当協会において寄附金を手渡されました。

吉田さんご自身も、ブラジルに移住して7年間暮らしていた際に、現地の方々の支援が大変ありがたかったという経験があったことから、コロナ禍で困っている外国人の方々の支援したいと当協会に相談がありました。

トゥアンさんは、新型コロナウイルス感染症が流行し始めた2020年の春頃から、窮状を訴える外国人の相談を受け、国籍に関係なく、食糧の支援や、住む場所を失った人のために部屋を借りて一時的に無償で提供したりしています。

また、在仙台ベトナム人協会の会長も務めており、山形県や岩手県でも協会を立ち上げるなど精力的に活動を行っています。

寄附金を受け取り、トゥアンさんは、「吉田さんの想いを受け取ることができて光栄です。みんなが笑顔になる活動を今後も続けて行きます。」と力強く抱負を語っていました。



ドバントゥアンさん



吉田ふく子さん

みやぎの国際活動団体

「日本モンゴル中国文化交流会」

日本モンゴル中国文化交流会は2018年に設立されましたが、これまで約20年間有志の皆さんと共に、日本でチャリティーコンサートを開催し、内モンゴルの経済的に恵まれない子どもたちのために継続的な支援をしてきました。内モンゴルの地元政府の協力も得て、チャリティー募金を原資に遊牧民が多く住む地域に寮や食堂を併設した公立学校をそれぞれ2006年と2010年に設立しました。さらに2009年以降、内モンゴルで音楽・民族舞踏を学ぶ子どもたちを招いて、宮城県内の小学校を訪問するなどの文化交流も行ってきました。

2021年3月7日に仙台国際センターにて「モンゴル文字の紹介と、馬頭琴の講座」(13:00~16:00)を開催する予定です。この会の設立により、さらに多くの方々にお力をお貸しいただき、コロナ禍でも日本の皆さんがモンゴルの文化に触れ、楽しんで、お互いの理解を深めていきたいと考えております。

代表 ボルジギン イリナ



2019年7月 仙台での文化交流
(奥:日本のバレリーナたち、中央:イリナさん、手前:中国内モンゴルの子どもたち)

会員は随時募集中

E-mail: borijnyirina@hotmail.com

サポーターの声

菅野ルカさん (台湾出身) MIA外国籍の子どもサポーター (中国語)



日本在住14年です。5年前にMIAの紹介を受けて最初はMIA外国籍の子どもサポーターとして、のちに県教育委員会の非常勤講師として、外国籍児童・生徒のサポートをしてきました。私の役割は大きく分けて3つあります。ひとつ目は児童・生徒の学習と心のサポートです。新しい環境で不安になっている子どもの気持ちを共有し、母語で励まし、授業の内容理解や日本語学習をサポートしています。2つ目は保護者と学校の架け橋です。保護者は日本の教育システムに詳しくないので、保護者が知りたいことや学校側が伝えたいことを通訳します。3つ目は私が先生方との信頼関係を結ぶことです。私は毎日学校にいるわけではないので、わからないこともあります。なので、先生方、特に担任とコミュニケーションをとることで連携を図り、子どもを見守ることができます。この活動でなにより素晴らしいと感じることは、想像以上のスピードで子どもたちが成長していることです。中学生は授業内容や受験システムが複雑で苦労することが多いですが、中1当初は少ししか話せなかった生徒が、中3にもなると同級生や先生との会話が流暢になり、英語や数学でも頑張っている様子を見ると、こちらも達成感を覚えます。

来日以前、私は台湾で研究医として働いていました。当時は主にパソコンが仕事相手でしたが、今は多くの人と接するようになり、日本で生きるために頑張っている子どもたちを応援する機会を持つたことに感謝しています。

賛助会員募集

MIA(公財)宮城県国際化協会は、県民参加の幅広い国際交流を進め、人と人との輪を広げていくために、皆様の御理解と御協力を求めています。



- 賛助会員の資格
本協会の趣旨に賛同し、運営活動に協力していただける個人や団体(国際活動団体、企業、機関)など
- 賛助会員の区分と年会費
個人会員/1口 3,000円
団体会員/1口 10,000円
- 賛助会員の特典
◎ 協会機関紙「みやぎの国際情報誌 倶楽部MIA」の定期送付(年6回)
- ◎ 当協会主催のイベントや各種講座の案内及び参加費の減免
- ◎ 個人会員については協会と提携する旅行会社が指定する国内外の旅行代金の一部割引
宮交観光サービス(株)
- ◎ 企業会員については世界各国国旗の無償貸し出し、及び当協会の外国人スタッフ等による国際理解出前講座の無償提供
- 入会方法
◎ 本協会あて御連絡ください。
◎ 本協会の申し込み用紙と振り込み用紙を送付いたします。



倶楽部 MIA vol.113

編集・発行
公益財団法人 宮城県国際化協会
〒981-0914
仙台市青葉区堤通雨宮町4番17号
宮城県仙台合同庁舎7階
TEL 022(275)3796
FAX 022(272)5063

E-mail mail@mia-miyagi.jp URL http://mia-miyagi.jp

